立命館小学校　2022 年度学校目標年度末報告シート

教育目標

以下の三点を育成児童像とする

①　「五つの誓い」を体現する子ども

わたしたちは、かけがえのない一人ひとりの命を大切にします。

わたしたちは、言葉を大切にし、心をみがいていきます。

わたしたちは、知りたいという気持ちを大切にし、あらゆることから学び続けます。

わたしたちは、たくましく生きていくために必要な根っこをきたえます。

わたしたちは、身につけた力を、進んで他の人に分かち伝えていきます。

② 自立的な学習者・生活者としての自分に肯定感をもち、自分の成長に期待と希望を抱く子ども

③ グローバルな視野での人権と社会貢献に対する高い意識をもち、利他の心を実践する子ども

重点目標

I.　目指す姿の素養をもった児童の安定的な獲得

II.　知的好奇心に導かれる自主的な学びの構築

III.　子どもたちと社会をつなげる「ハブ」機能の充実

IV.　心理的安全性の高い組織づくり

V.　新たな時代の 12 年一貫教育に向けての小中高連携

Ⅰ.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	教育活動の価値の掘り起こしと学校内での相互理解・外部発信を通じた広報の充実	(1)	学校内外での入試イベントを充実させる	◎
		(2)	日常的な学校の様子を伝えるため、HP や SNS での情報発信を充実させる	○
		(3)		
		(4)		

Ⅱ.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	立命館小学校版「探究学習」モデルの確立 教科横断型探究プロジェクト	(1)	各学年における教科横断型探究学習の実施	○
		(2)	2025 年度新カリキュラム構築に向けた協議	◎
		(3)	他校視察を通じての調査研究	◎
		(4)		
2	グローバル教育新展開ー学校国際化構想と世界との協働学習の日常化	(1)	交流プログラムのオンライン実施	◎
		(2)	World Week における RU との連携	◎
		(3)	RU キャンパスアジアプログラムとの連携による中国語・韓国語学習の開発と実施	◎
		(4)	APU での Global Camp の開発と実施	◎
		(5)	海外プログラム再開に向けての準備	○
		(6)		

Ⅲ.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	EdTech を活用した自由な学びのスタイルの構築	(1)	オンライン自主学習教材の試行と運用	○
		(2)	iPad と Surface の更なる活用	◎
		(3)		
		(4)		
2	教育ベンチャー事業の挑戦：立命館小学校がプロデュースする学びの場の提供	(1)	アフタースクールの外部委託化（プライマリータイム実施）	◎
		(2)	EARTH 構想の具体化と試行（りっつひろば実施）	◎
		(3)		
		(4)		

Ⅳ.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	教職員・児童の心身の健康を重視した組織づくり	(1)	日常的な負荷の削減の検討	○
		(2)	長時間労働の是正に向けた業務改善の実施	○
		(3)		
		(4)		
2	ダイバーシティ&インクルージョンの推進を軸とした新しい組織文化づくり	(1)	多様性尊重についての理解促進	○
		(2)	特別支援体制の構築	◎
		(3)		
		(4)		

Ⅴ.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	立命館中高との連携強化と 12 年一貫教育の実質化	(1)	R12 部長会議の安定的な運営	◎
		(2)	小中高連携イベントの充実	◎
		(3)	児童・生徒の成長に関わるデータ共有と政策化	○
2		(1)		
		(2)		
		(3)		

達成状況

◎の評価とした項目については、概ね予定どおり進めることができた。○の評価としたものについては、以下の事情を考慮している。

Ⅰ-1-(2)：HP での情報発信の内容について、日常的な学校の様子を伝えることは一定できているものの、旧来の情報が十分更新されていない部分があった。今後、より情報更新がしやすく、SNS との連携などのしやすい仕組みを構築するために、HP のシステム全体を更新する必要がある。

II-1-(1)：教科横断型探究学習については、多くの学年で新しい取り組みとして成果を上げたが、学年によってまだ実施状況に差がある。

II-2-(5)：海外プログラム再開に向けての準備については、今年度も新型コロナの影響が継続したため、可能な範囲での取り組みにとどめた。
Ⅲ-1-(1)：オンライン自主学習教材については、全校での試行を行うことはできたものの、活用率は必ずしも高くない。また、児童の学力形成や個別最適の学びにつながっているかという観点から、授業や宿題との関連を整理しながら、より効果的な活用方法を検証していく必要がある。
IV-1-(1)(2)：長期間にわたる新型コロナ禍の影響からの健康回復を学校経営方針の一つの柱としてきた。また、法令遵守と教職員の健康維持を基本とした働き方改革を推進し、一定の成果を上げてきたが、更なる取り組みが必要である。
IV-2-(1)：多様性尊重についての理解促進については、さまざまな取り組みの中で学校全体で進め、一定の成果を上げることができた。引き続き理解の広がりと深まりを推進する必要がある。
Ⅴ-1-(3)：立命館中高とは管理職間での定期的な協議を安定的に行うとともに、具体的なテーマに基づいての担当者間交流は進んできた。今後さらに児童生徒に学びと成長に寄与する情報共有のあり方についてさらに充実させる必要がある。

改善策

上記課題について、2023 年度においては以下の方策で改善及び更なる推進に務める予定である。
Ⅰ-1-(2)：既存の HP の内容を全体として確認し、必要な更新を行うとともに、これから立命館小学校が目指す学校像についても発信を始める。
II-1-(1)：今年度の実績を踏まえ、全ての学年での実施をめざすとともに、新カリキュラム構築につながるよう持続可能な形を追究する。
II-2-(5)：新型コロナの影響を見極めつつ、可能なところから再開を検討するとともに、新規プログラムの可能性も検討する。
Ⅲ-1-(1)：2022 年度の検証結果をもとに、2023 年度には新たな仕組みでの試行を行い、学校全体での活用を具体的に推進する。
IV-1-(1)(2)：引き続き児童一人ひとりが自立した学習者として成長していくカリキュラムや時程のあり方を検討していくとともに、働き方改革を確実に推進する。
IV-2-(1)：多様性尊重について、学校のさまざまな取り組みの中で、引き続き理解の広がりと深まりを推進する。
Ⅴ-1-(3)：引き続き管理職間での定期的な協議を安定的に継続するとともに、児童・生徒に関わる情報共有の仕組み構築について検討する。

学校関係者評価に関する事項

委員会構成	池坊雅史（池坊華道会事務総長） 岡野益巳（清和会会長　株式会社岡野組代表取締役会長） 小栗栖元徳（御靈神社白雲神社宮司） 齋藤茂（株式会社トーセ代表取締役会長 兼 CEO） 高須秀視（元・ローム株式会社社友　株式会社 SCREEN ホールディングス取締役） 中川哲（株式会社 EdLog 代表取締役社長　文部科学省初等中等教育局視学委員 GIGA スクール戦略担当） 平林幸子（京都中央信用金庫相談役） 泉浩一（立命館小学校保護者会会長） 久野信之（学校法人立命館常務理事（一貫教育担当）） 第 1 回学校関係者評価委員会
開催日程 主な議題	＜開催日時＞ 2022 年 7 月 5 日 13:30-15:30 ＜議題＞ １．2021 年度の立命館小学校の自己評価について ２．2022 年度の立命館小学校の学校目標について ３．その他

	第２回学校関係者評価委員会 ＜開催日時＞ 2023年3月16日9:30-11:30 ＜議題＞ １．2022年度の立命館小学校の自己評価について ２．2023年度の立命館小学校の学校目標について ３．その他
評価・改善事項	2022年度の立命館小学校の自己評価について、以下のようなご意見・助言をいただいた。 ・自己評価については、概ね賛同できる。 ・入試関連イベントを活発化することについて、昨年の委員会で提案したことを具現化し、安定的な入学希望者の確保につなげたことは評価できる。HPやSNSでの情報発信についてはさらなる充実が求められる。 ・オンライン自主学習教材の活用については、授業と連動させすぎると限界があるが、児童が自由に進めていけるような仕組みにすることで、活用が促進されるのではないか。また、オンラインでの個別最適の学びについては、子どもがオンライン上で孤立化しないことが大事である。オンライン上のコミュニティをつくって、ピアサポートできる形をもつのがよい。 ・ポストコロナの状況を見据えた時、学校に来ているからこそできることと、学校に来なくてもできることを改めて整理していくことが必要ではないか。 ・日本企業の競争力が低下している。それは、大学でイノベーティブな人材を育成できていないことにも起因しており、その根幹には、初等中等教育において、自分から学びにいく姿勢を育てたり、他人とは違う好奇心を大切にしながら多様性の中で切磋琢磨できるような環境が十分でないことがある。一貫教育だからこそできる、受験勉強に遮られないような探究型の学びを充実させてほしい。 ・「１２年一貫の小中高連携」とあるが、大学と大学院も含めた長期的な視野を持つとともに、小学校教育に大学の豊富な教育研究にかかわるリソースを活用することも検討してほしい。 ・グローバル教育を展開していくにあたって、だからこそ日本・京都についての学びを大切にしてほしい。「ハイテク産業」「大学」「文化」は京都が誇るものであり、そういった価値を学び、体現できるような教育を望む。 ・Chat GPTの展開にみられるように、AIの進展が急速に進んでいる。その流れに飲まれるのではなく、その背景を踏まえながら、信念やビジョンを持った教育を進めていくことが必要である。